

## [原著論文]

非当事者攻撃に対する集団同一化と被害の不公正さの効果<sup>1)~3)</sup>

熊谷智博・大淵憲一 (東北大学大学院文学研究科)

The effects of group identification and the unfairness of harm on third party aggression

Tomohiro KUMAGAI and Ken-ichi OHBUCHI (*Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University*)

In intergroup conflict a third party sometimes intervenes aggressively into the interactions between the concerned parties, escalating the conflicts. We hypothesized that the third party will become aggressive if they perceive that a fellow member of their group, with whom they strongly identified themselves, is harmed by the other group and that the perception of harm is more definitely determined by unfairness than by the objective severity of the harm. Group identification was manipulated by cooperative ingroup activities. Half of the participants observed that an ingroup fellow member was harmed by an outgroup member based on unfair evaluation, while the others observed that the harm was given based on fair evaluation. They were then given a chance to retaliate against the harm-doer by creating unpleasant noises. The results indicated that both aggressive motivation and behaviors were increased by unfair harm only when participants strongly identified with the ingroup. The group identification did not affect the perception of unfairness. These results suggest that symbolic or psychological harm affects third-party aggression.

Key words: third-party aggression, group identification, unfairness of harm, inter-group conflict  
キーワード: 非当事者攻撃、集団同一化、被害の不公正さ、集団間紛争

## 背景

現代社会の国際情勢で頻繁に見られる民族紛争では、対立がしだいに激化し規模が拡大していくことが大きな問題の一つである。紛争状況では、一般的に人々は自分が受けた被害よりもより強い危害を敵に与えることが知られている (Baron & Richardson, 1994; O'Leary & Dengerink, 1973)。この報復の応酬が紛争事態の悪化の原因の一つである。しかし紛争が集団間の場合、その悪化には別の要因もある。それは、直接は被害を受けていない非当事者が、紛争に自発的に参加することである。その結果、紛争はより大規模で、より激しいものとなる。本研究では非当事者が紛争に参加する過程において、集団同一化の強さと、被害の公正さの認知によって加害者に対する攻撃が決定される心理過程について検討した。

## 非当事者攻撃

さまざまな攻撃行動のうち、集団間攻撃の特徴は、攻撃の応酬が集団単位で行われるので、報復を行う者が必ずしも被害者ではない場合が多いという点である (Kumagai & Ohbuchi, 2001; Lickel, Miller, Stensstrom, Denson, & Schmader, 2006)。テロリストは、自分自身に直接危害を加えた相手に対して報復することもあるが、遠く離れた同胞が他の集団から迫害を受けたことを情報メディアを通じて知ったとき、その迫害をした集団と関係のある人や物、組織をテロの対象とする。本研究ではこのように直接は被害を受けていない個人が、内集団成員に危害を加えた者に攻撃的に反応することを非当事者攻撃と定義する (Kumagai & Ohbuchi, 2001, 2006)。非当事者とは、原因となった紛争において直接の被害者でも加害者でもなかった者という意味である。

攻撃の強力な動機は報復である (Baron & Richardson, 1994; Tedeschi & Felson, 1994)。これは人々が物理的であれ象徴的であれ、被害者が受けた被害と同程度の危害を加害者に与えようとする行為である。この報復は不当な危害によって損なわれた公正を回復したり、あるいは将来のいっそうの危害を予防することを目的に行われる (Ohbuchi, 1996; Tyler, Boeckman, Smith, & Huo, 1997 大淵・菅原監訳 2000)。この報復動機が非当事者攻撃の場合にも生じ、重要な機能を果たしてい

1) 本研究は東北大学大学院文学研究科、21世紀COEプログラム「社会階層と不平等研究教育拠点」においてなされた研究の成果である。

2) 本研究は東北心理学会第59回大会で発表された。

3) 論文作成にあたっては、北海道教育大学函館校の今在慶一朗先生よりたいへん有益なコメントをいただきました。記してお礼申し上げます。

ると仮定した。

被害を受けていないはずの非当事者は、どのようにして報復動機を抱くのだろうか？ そこには集団同一化が大きな役割を果たしていると推測できる。Yzerbyt, Dumont, Wigboldus, & Gordijn (2003)によれば、内集団成員が受けた不利益に対して感じる怒りと攻撃的傾向は、人々が内集団に強く同一化しているほど強くなる。この過程で重要な心理的要因は社会的自己である。社会的自己とは社会的カテゴリーによって形成された自己で、これは集団に同一化した個人の感情、認知、態度、行動に影響を与える。Reicher (1987 蘭・磯崎・内藤・遠藤 1995)の研究では、実験に参加した学生を所属学部で呼ぶことによって、実験参加者の社会的自己を強めた。その結果、実験参加者は社会的自己のプロトタイプと一致する行動をより多く示した。さらに、集団間感情理論 (Intergroup emotion theory; Mackie, Devos, & Smith, 2000; Smith, 1999)に基づく研究は、社会的アイデンティティが顕現化しているとき、すなわち内集団を社会的自己として強く認識しているときには、個人的にはかかわりがない事象であっても、人々は内集団成員が危害を加えられたり、援助を受けたことを知って強い感情を体験し、集団志向性を強めることを報告している (Devos, Silver, Mackie, & Smith, 2002)。こうした理論と研究に基づいて、集団同一化が非当事者の社会的自己を強め、それが内集団の受けた被害に対する報復動機を形成し、最終的には非当事者攻撃を生み出すと仮定された。

#### 集団同一化と協力経験

集団に対する同一化は、勢力 (Mullen, Brown, & Smith, 1992) や地位の安定性 (Ellemers, Van Knippenberg, & Wilke, 1990; Van Knippenberg & Ellemers, 1990), 集団間の競争状態 (LeVine & Campbell, 1972) によって強まることがこれまでの研究から報告されている。これらは集団間の関係が人々の集団同一化に影響を与える要因であることを示している。しかし集団同一化は集団間の関係よりもむしろ集団内での経験によって促進されることが多い。そのような経験のうち、最も一般的に見られるものは協力経験である (Sherif, 1966; Sherif, Harvey, White, Hood, & Sherif, 1961)。仲良し同士の集まりから、企業組織、国家に至るまで、集団は必ず成員同士の協力を必要とする。集団内での他の成員との協力経験は相互依存と共通運命の感覚を人々に与え、集団成員に対する魅力 (Rosenbaum, Moore, Cotton, Cook, Hieser, Shover, & Gray, 1980) と集団に対する同一化を促す (Jackson & Smith, 1999)。したがって集団内での協力経験は集団同一化に対して普遍的で、強い影響力のある要因と推測できる。集団内協力経験が人々の行動に与える影響としては、集団に対する自

発的貢献といった向社会的行動への影響は検討されてきたけれども (De Cremer & Tyler, 2005; Spears, Doosje, & Ellemers, 1997), 人々の攻撃行動、特に集団間の攻撃行動に与える影響についてはあまり検討されてこなかった。そこで本研究では、協力経験と非当事者攻撃の関係が実験室実験によって検討された。

#### 集団間公正と被害の知覚

本研究で扱う非当事者攻撃の基本的な動機は報復である。報復は被害者が被害状況をどのように知覚するかによって決定されることが知られている (Averill, 1982; Ferguson & Rule, 1983)。そのため単に物理的な被害だけではなく、象徴的・心理的被害も報復を動機づける。心理的被害である他者からの侮辱は強い報復行動を喚起するが (Baumeister & Boden, 1998)、それは被害者に自我脅威をもたらすためである。この自我脅威となりうる要因としては、侮辱以外にも他者からの誹謗・中傷 (Hammock, Rosen, Richardson, & Berstein, 1989; Richardson, Leonard, Taylor, & Hammock, 1985) や、集団からの排除 (Williams & Zadro, 2005) が挙げられる。そしてこれら以外にも、人々が日常生活において他者や組織内での関係性を良好ではないと判断したときには、深刻な心理的脅威を感じるだろう。このような主観的な関係性評価において、重要な判断基準となるのが社会的公正である。

社会的公正とはある行為や決定が、関係者をその資格や権利に相応しい処遇をしているということである (Ohbuchi, 2007)。社会的公正は人々の個人的人間関係から、小規模のグループ、企業組織、政治制度、そして国際関係に至るさまざまな関係性において、日常的に人々に影響を与えている重要な心理的概念である。人々の社会的公正感を決める重要な要因としては、衡平性が挙げられる。Adams (1965) の衡平理論によれば、衡平とは、入力としての貢献度と出力としての報酬のバランスである。そしてこの理論では人々の満足や行動は客観的な結果の水準ではなく、受け取った結果が衡平と判断されるかどうかに関係していると仮定されている。人々は衡平な成果を受け取っていないときには憤慨し、入力と出力のバランスを回復しようと動機づけられる。このことは逆に、不十分な報酬を受けても、それが不十分な貢献の結果である場合には、人々は不公正感を感じないということである (Greenberg, 1988; Tyler *et al.*, 1997)。したがって不公正感による怒りとそれによって生じる攻撃行動は、十分な成果を挙げたにもかかわらず低い評価を受けたときにのみ生じると推測できる。

#### 本研究の理論モデル

この不公正感によって生じる攻撃行動は、非当事者攻撃の場合にも当てはまると仮定できる。人々は自分個人ではなくても、集団成員が不公正な扱いを受けたときに、

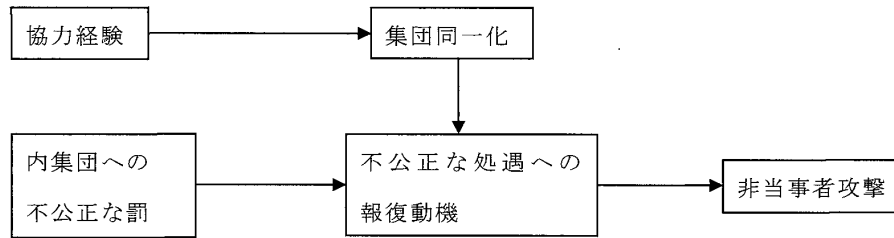


図1 集団間不公正が非当事者攻撃を強める心理過程モデル

それを自集団に対する不公正な処遇として認知し報復動機を抱き、その不公正な扱いをした者に対して攻撃を行うと考えられる。しかし集団間の紛争場面では、非当事者は内集団への不公正に対して常に不満を感じるわけではないことも考えられる。すでに議論したように、内集団に対して強く同一化しているときには、内集団の受けた不公正を社会的自己への脅威と認知するが、集団同一化が弱い場合にはそのような脅威を感じないと考えられる。したがって非当事者の攻撃も内集団に強く同一化している場合だけであると予測できる。この一連の心理過程をモデル化したものが図1である。このモデルに基づき設けられた仮説は以下のとおりである。

集団内で協力を経験した実験参加者は、協力を経験しなかった実験参加者よりも内集団に対して強く同一化するだろう（仮説1）。また集団内での協力を経験した実験参加者は、内集団成員が課題に対して高い成果を上げたにもかかわらず低い評価と罰を受けたとき、それを不公正であると知覚し（仮説2）、その不公正感の外集団に対する報復を動機づけ（仮説3）、攻撃を強めるだろう（仮説4）。本研究では、実験室実験によって、この理論モデルと仮説の検証を行った。

## 方 法

### 参加者と要因配置

日本の国立大学生40名が実験に参加した。募集は心理学の授業中に実施した。実験参加者は協力経験要因2水準（協力経験 vs. 協力非経験）×成果要因2水準（高成果 vs. 低成果）の4条件のいずれか一つにランダムに配置した（各条件10名）。

### 手続き

**集団成員性の形成** 実験者は実験参加者に、実験の目的はストレスと創造性の関係を検討する実験で、実験参加者は合計6名の参加者が同時に参加して、6人は二つのグループ（ $\alpha$ グループと $\beta$ グループ）に分かれて実験を行うと説明した。実験参加者は必ず $\alpha$ グループに割り振られた（実際には $\beta$ グループは存在しなかった）。 $\alpha$ グループは3人で構成され、そのうちの1人は実験協力者であった。実験協力者には「 $\alpha 2$ 」、実験参加者は「 $\alpha 1$ 」か「 $\alpha 3$ 」という名前を与えた。

**協力経験** 協力経験条件の実験参加者は第1課題として、3人で協力してジグソーパズルを完成させる課題を行った。ジグソーパズルは途中まで作成してあり、残り30ピースを正しい位置にはめて、できるだけ早く完成させる課題と実験参加者は説明された。またこの課題は $\beta$ グループとの競争課題で、先に完成させたグループのメンバーには賞品として500円分の図書カードが与えられると説明した。第1課題終了後、協力経験条件の実験参加者には完成にかかった時間にかかわらず、「 $\beta$ グループよりも早くパズルを完成させたので競争課題に勝利した」と説明し、その場で賞品を与えた。協力非経験条件の実験参加者はこのような課題を行わず、単にグループ分けを行っただけであった。集団間競争課題での協力経験が集団同一化を強めたか否かを確認するために、「あなたはこの $\alpha$ グループに所属していると、どれくらい強く感じましたか？」（所属感）、「他の人から見ても、このグループは好ましいと思いますか？」（集団自尊心）の項目を実験参加者に7件法で回答させた（1「全くそう思わない」～7「全くそう思う」）。

**課題の成果の観察** 実験者は実験参加者に第2課題として、絵画完成課題を行うよう指示した。課題は簡単な図形（例えばY字型）を元に、物や風景の絵を5枚完成させるものであった。実験者は実験参加者に、実験の目的は相手から評価されるというストレスのかかる状況が創造性に与える影響を調べることであり、そのためでき上がった作品は $\beta$ グループと交換してお互いに評価しあうと説明した。すべての条件において実験協力者が絵画の作成を担当し、2人の実験参加者は $\beta$ グループの作った作品の評価を担当すると説明された。実験者は作品の評価の際には絵の上手い下手ではなく、オリジナリティやユニークさを重視するように強調した。高成果条件では、実験協力者はよく考えられた、完成度の高い作品を作成した。一方、低成果条件では実験協力者は単純で完成度の低い作品を作成した。実験協力者はこれらの作品を作成できるようにあらかじめ練習していたが、毎回初めて書いたように演じるよう指示されていた。この2条件で用いられた作品は、実験前に別の10人による創造性評価（1「全く創造性がない」～9「非常に創造性がある」）において評価に有意差があることを確認

## 熊谷・大淵：非当事者攻撃と不公正知覚

されたものであった ( $t(18)=6.08, p<.01$ , 両側検定、高成果条件:  $M=6.54, SD=1.05$ , 低成果条件:  $M=3.88, SD=0.89$ )。

**被害の観察** 実験協力者が五つの絵画作品を完成させた後、実験参加者は実験協力者が作品の評価として、外集団から危害を加えられる様子を観察した。この評価課題にはパーソナルコンピュータ(PC)を用いた。画面には1「全く創造性がない」～9「非常に創造性がある」までの9段階のボタンが表示されていた。実験者は評価ボタンがそれぞれの強さの不快感のノイズ音と連動しており、評価者が悪い評価をすると、罰としてその評価の悪さに応じた大きさのノイズ音を作品の作成者が聞かされるようになっていてと説明した。ノイズ音の大きさは40 dB (レベル1) から80 dB (レベル9) まで5 dB ずつ上昇するようになっていた。実験参加者は評価の前に、サンプルとしてレベル3, 5, 7, 9のノイズ音をヘッドフォンで聞いた。実験協力者は3人の $\alpha$ グループメンバーの中央に着席し、条件によってあらかじめ練習しておいた作品を初めてのように演技しながら作成した。実験協力者の前にはPCのディスプレイとヘッドフォンが置かれていた。PCの画面と実験協力者の作成した作品は両隣にいる実験参加者からも見えるようになっていた。すべての条件で、参加者は実験協力者が悪い評価を5回受ける様子を観察した(ノイズ音のレベルは7, 9, 7, 8, 9であった)。

**攻撃の測定** 実験者は実験参加者に、外集団成員が作成した絵画完成課題の作品5枚を手渡し、PCを使ってその作品に対する評価を行うように指示した。実験者は五つの作品それぞれに対して、実験参加者に画面上の九つのボタンのうち一つをクリックして評価を伝えると説明した。そしてその選択された評価に応じて不快なノイズ音が6秒間、外集団成員に与えられると説明した。攻撃の測度は実験参加者がそれぞれの作品に対して選択したノイズ音の強さを用いた。攻撃を測定している間は、それぞれのメンバーの間には仕切りが設けられ、それぞれの実験参加者がどのような評価をしたかはお互いに見えないようにした。

**媒介変数の測定** 評価課題の後で、それぞれの実験参加者はPCを用いて質問項目に回答した。公正知覚の項目として「あなたは $\alpha 2$ が受けたノイズと評価がどれくらい公正な評価だと思いましたか?」、「あなたは $\beta x$ が $\alpha 2$ の作品に対して客観的な評価に基づいてノイズ音を与えたと思いますか?」、「あなたは $\alpha 2$ が $\beta x$ から受けた扱いが適切なものであったと思いますか?」の3項目を用いた。加害者の名前を $\beta x$ としたのは、外集団の誰が加害者かを特定させず、外集団全体を加害者と認知させるためであった。さらに報復動機項目として「あなたはノイズ音を与えることによって $\beta x$ に返しをしよ

うと思いましたか?」を用いた。それぞれの質問項目に対して実験参加者は7件法で回答した(1「全くそう思わない」～7「全くそう思う」)。

**ディブリーフィング** 実験終了後、実験者は実験参加者に実験の目的、仮説、実験デザイン、そして手続きについての説明を行った。その説明の中で、実際には $\beta$ グループの実験参加者は存在せず、すべてPCのプログラムを相手にして実験を行っていたこと、また $\alpha 2$ は実験協力者であったこと、そして実験参加者は実際には誰も傷つけてはいないことを伝えた。実験者はすべての実験参加者には実験内容および手続きについて説明した後、不自然な点や疑問を感じた点の有無を尋ねたが、それらについて指摘する参加者はいなかった。

## 結 果

## 集団同一化

集団での協力経験によって実験参加者の $\alpha$ グループへの集団同一化が強められたか否かを検証するために、まず集団同一化項目2項目の信頼性分析を行った。その結果、ほぼ満足すべき水準の内的整合性が見られた( $\alpha=.694$ )。この2項目の平均得点を集団同一化尺度得点とし、それに対して協力経験要因による $t$ 検定を行った結果、有意差が見られた( $t(38)=2.50, p<.05$ , 両側検定)。集団での協力を経験した実験参加者( $M=3.72, SD=0.81$ )は、単にグループを形成しただけの実験参加者( $M=2.97, SD=1.05$ )よりも内集団に対する同一化が強かった。

## 媒介変数

公正の知覚に関する3項目に対して信頼性分析を行った結果、高い内的整合性が見られた( $\alpha=.912$ )。これを不公正知覚項目とするために項目得点を逆転させた後、3項目の平均得点を求めた。その平均得点に対して協力経験要因(2水準)と成果要因(2水準)による2要因分散分析を行った。その結果、成果要因の主効果が有意であった( $F(1, 36)=23.84, p<.001$ )。高成果条件の実験参加者( $M=5.80, SD=0.71$ )は、低成果条件の実験参加者( $M=4.23, SD=1.21$ )よりも、実験協力者が受けた被害をより不公正と評定した。協力経験要因の主効果、および協力経験要因と成果要因の交互作用はいずれも有意ではなかった。報復動機に関しては協力経験要因と成果要因の主効果、および交互作用はいずれも有意ではなかった。

## 攻撃行動

実験参加者が外集団成員に対して与えたノイズ音の強さ5回分の平均値を算出したものが攻撃の測度として用いられた。これに対して協力経験要因(2水準)と成果要因(2水準)による2要因分散分析を行った。その結果、協力経験要因の主効果が有意であった( $F(1, 36)=$

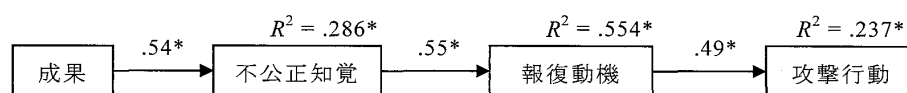


図2 協力経験群のパス分析結果（有意な効果を示したパスのみを表示）

注1) 数値はステップワイズ法による重回帰分析での標準偏回帰係数。

注2) \* $p < .05$

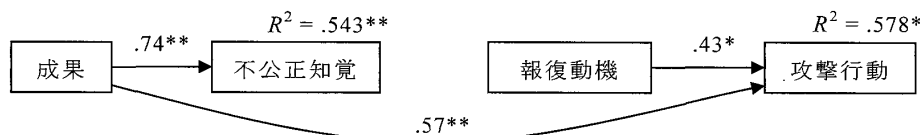


図3 協力非経験群のパス分析結果（有意な効果を示したパスのみを表示）

注1) 数値はステップワイズ法による重回帰分析での標準偏回帰係数。

注2) \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

9.28,  $p < .01$ ）。協力経験条件の実験参加者 ( $M = 5.91$ ,  $SD = 1.38$ ) は、協力非経験条件の実験参加者 ( $M = 4.81$ ,  $SD = 1.28$ ) よりも、外集団成員に対してより強いノイズ音を与えた。また、成果要因の主効果も有意であった ( $F(1, 36) = 15.91$ ,  $p < .01$ )。高成果条件の実験参加者 ( $M = 6.08$ ,  $SD = 1.30$ ) は、低成果条件の実験参加者 ( $M = 4.64$ ,  $SD = 1.19$ ) よりも、外集団成員に対してより強いノイズ音を与えた。協力経験要因と成果要因の交互作用は有意ではなかった。

#### パス分析

攻撃行動に対する協力経験要因と成果要因の効果、不正知覚、報復動機の媒介効果を検証するために、重回帰分析を行った。理論モデルは次のとおりである。始めに課題に対する成果が知覚された不正感を強める。実験参加者は内集団成員が悪い評価を受ける様子を観察したが、良い成果を観察した実験参加者のほうが、悪い成果を観察した実験参加者よりも、その評価を不正と認知することは上述のとおりである。そこで成果要因をダミー変数として、高成果条件を1、低成果条件を0として設定した。次に知覚された不正感は報復動機を強め、それが攻撃行動を強める。不正知覚はすでに求めた尺度得点を用い、報復動機は項目得点を用いた。攻撃行動もすでに求めた実験参加者が外集団成員に与えたノイズ音5回分の強さの平均値を用いた。このモデルを協力経験条件と協力非経験条件に分けて個別に重回帰分析を行った。回帰分析は第1段階として、攻撃行動を目的変数、成果、不正知覚、報復動機を説明変数として、次に第2段階として報復動機を目的変数、成果と不正知覚を説明変数として、そして最後に第3段階として不正知覚を目的変数、成果のみを説明変数として回帰分析を行った。これは集団同一化の強さが報復動機を調整するという理論モデル（図1）に基づき、不正知覚から報復動機へのパスは協力非経験条件よりも協力経験条件のほうが強いと予想したためである。その結果、

図2に示されているように、協力経験条件では成果要因が不正の知覚を強め、これが報復動機を介して攻撃行動を強めた。一方、図3に示されているように、協力非経験条件でも成果要因は不正の知覚を強めた。また報復動機は攻撃行動を強めていた。しかし不正知覚から報復へのパスは協力非経験条件では有意ではなかった。また成果要因は直接攻撃行動を強めていた。

#### 考 察

本研究では、直接被害を受けていない非当事者が、他人の受けた被害に対して攻撃的に反応する心理過程を検討した。特に集団に対する同一化がそれを調整すること、そして他人の受けた被害は物質的な被害の大きさではなく、被害の公正さの判断によって決定される点を実験室実験によって検討した。

本研究での第1の予測は、人々の集団同一化は集団内での協力経験によって強まるというものであった。結果は実験参加者が集団内で協力を経験した群のほうが、単にグループ分けをされた群よりも強い集団同一化を示していた。したがって仮説1は支持された。ただし、協力経験条件と協力非経験条件の間には実験操作のうえで単に協力だけではなく、競争や報酬の有無などに関しても違いがあったので、これらのうちいずれかの要因によって非当事者攻撃が強められた可能性を残してしまった。この点に関して、本研究で目的とされていた集団同一化の操作は成功しているため、少なくとも調整変数としての集団同一化の効果については議論することには問題はないと考えられる。

本研究の第2の予測は、内集団が受けた被害の不正さの知覚は集団同一化の強さによって調整されるというものであった。不正の知覚に関して成果要因の主効果のみが有意であり、協力経験要因との交互作用は有意ではなかった。したがって仮説2は支持されなかった。このことは予測に反して、不正さは成果に対して外集

## 熊谷・大淵：非当事者攻撃と不公正知覚

団がどのように評価したかによって決定される割合が大きく、それと比べると内集団に対する同一化の強さによる影響は弱いことを示しているのかもしれない。パス分析の結果も同様の結果を示していることから、人々の不公正知覚は予測したよりも態度や集団同一化の強さなどの心理状態によって影響を受けにくい、比較的堅固なシステムであったということが考えられる。しかし公正さの知覚に関しては必ずしも堅固なものではなく、感情状態や不確実性の喚起などによって影響されることもいくつかの公正研究において報告されている (Van den Bos, 2003; Van den Bos & Lind, 2002)。このように先行する知見とは異なった結果が示された原因としては、不公正知覚が対象として知覚する不公正のあいまいさにも依存していることが考えられる。例えば Van den Bos (2003) の研究では、あいまいな対象に対する公正判断のときに、感情状態によって公正判断がゆがめられていた。したがってこの点については対象となる公正のあいまいさと集団同一化の交互作用を考慮した実験デザインで、再度検討する必要があるだろう。

本研究の第3の予測は、外集団からの不公正な処遇に対する報復動機は集団同一化によって調整されるというものであった。報復動機についてはパス分析の結果から、協力を経験した群、すなわち実験参加者の集団同一化が強い場合にのみ、内集団が受けた被害の不公正さによって報復動機が強められていた。したがって仮説3は支持された。先述のとおり集団同一化が不公正知覚を強める効果がなかったのに対して、報復動機に対しては強める効果があったことは興味深い結果である。このことから集団同一化が被害情報の知覚の段階ではなく、より意識的な認知過程である意思決定の段階でより顕著な効果をもつことが考えられる。ただし、本研究での集団同一化の操作は決して強力なものであったとは言えず (集団同一化得点は7件法で協力経験群  $M=3.72$ , 協力非経験群  $M=2.97$ )、もし集団同一化が非常に強まっていたとしたら、集団間感情理論が予測するように (Mackie *et al.*, 2000; Smith, 1999) 不公正の知覚の段階から集団同一化による調整効果が見られたということも考えられる。この点は先述の被害の不公正のあいまいさも考慮したうえで、将来の研究にて検討したい。

そして本研究の第4の予測は、不公正な評価を内集団成員が受けたときに非当事者が加害者に対して行う攻撃行動は、集団同一化の強さによって調整されるというものであった。パス分析の結果は予測されたとおり、集団同一化の強い場合には不公正知覚が報復を動機づけ、攻撃行動が生じることを示していた。したがって仮説4は支持された。しかし予測されていなかった結果として、協力非経験条件では成果要因から攻撃行動への直接のパスが見られた点がある。これは相手に対する加害の意図

はなく純粹に作品の評価を行ったと解釈できる。協力非経験条件では内集団に対する同一化が弱いいため、内集団成員が受けた評価を参加者は単に自分が評価を下す際の参考としたと考えられる。完成度の高い作品を作ったのにもかかわらず酷い評価が下されている場合には、参加者は厳しい評価基準を設け、完成度の低い作品に対して酷い評価が下されている場合には、参加者の評価基準はそれほど厳しいものにしなかったと推測される。そのため参加者が外集団成員の作品を評価する際に、高成果条件では厳しい判断基準に基づいて強いノイズ音を、低成果条件ではゆるい判断基準に基づいて弱いノイズ音を選択したため、成果要因のみによってノイズ音が強められたと考えられる。このように協力経験条件と協力非経験条件では異なった心理過程によって攻撃行動が強められていた可能性が考えられるけれども、参加者はあらかじめノイズがどれくらい不快であったかを知っていたこと、また両方の群において報復動機からノイズ強度への正のパスが見られていることから、ノイズ音の強さは単なる評価ではなく攻撃と解釈したほうがより整合性が高いと考えられる。

## 今後の課題と発展性

これまでの公正研究においても集団内での資源分配や処遇面での物質的な良し悪しだけではなく、その不適切さや不公正さも人々の不満と否定的反応を強めることは報告されてきたが (Adams, 1965; Skarlicki & Folger, 1997)、本研究はこれが当事者だけではなく非当事者にも当てはまることを示した。しかし非当事者攻撃の心理過程ではこのことはむしろ当然であるとも言える。非当事者は紛争場面において直接被害を受けていないので、被害の認知は実際の被害者が受けたことに対する推測に基づかざるをえない。そのため非当事者は、紛争当事者よりも物理的被害以外の点から加害者の意図や被害の不適切さを判断し、攻撃の程度を決定していると考えられる。物理的被害の大きさは非当事者にとっては確かに重要な情報であるかもしれないが、一方でさまざまな情報のうちの一つに過ぎず、当事者と同程度にはそれに注意を払わないため、その影響も弱いかもしれない。したがって非当事者にとっては物理的被害の程度よりも、知覚された不公正の程度のほうが攻撃行動を決定づけるより重要な情報となる可能性が本研究から推測できる。

本研究の将来的な展開としては、他の形態の攻撃行動にも、本研究の知見が適応できるかどうかを検討することが考えられる。本研究では攻撃の測定として不快なノイズ音を用いた。これは明らかに不快な手段を用いることによって参加者の攻撃性を明確にするためであった。しかし現実場面での攻撃行動にはこのような直接的な攻撃以外にも、相手に与える報酬のようなポジティブな刺激を意図的に減らすといった方法も頻繁に用いられる。

さまざまな形態の攻撃行動においても非当事者攻撃の心理過程が同様に当てはまるかどうかという、非当事者攻撃の広範さについては将来的に検討する必要があるだろう。

また本研究では非当事者の被害知覚だけを検討したが、このような当事者と非当事者の紛争に対する認知や反応の違いは、集団間葛藤の心理過程を明らかにし紛争解決の手段を生み出すうえで重要な問題である。この点については将来の研究において当事者と非当事者の比較を通じて検討する必要があるだろう。

### 引用文献

- Adams, J. S. (1965). Inequity in social exchange. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*: Vol. 2. New York: Academic Press. pp. 267-299.
- Averill, J. R. (1982). *Anger and aggression: An essay on emotion*. New York: Springer-Verlag.
- Baron, R. A. & Richardson, D. R. (1994). *Human aggression*. New York, NY: Plenum Press.
- Baumeister, R. F. & Boden, J. M. (1998). Aggression and the self: High self-esteem, low self-control, and ego threat. In R. G. Geen and E. Donnerstein (Eds.), *Human aggression: Theories, research, and implications for social policy*. San Diego, CA: Academic Press. pp. 111-137.
- De Cremer, D. & Tyler, T. R. (2005). Managing group behavior: The interplay between procedural justice, sense of self, and cooperation. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*: Vol. 37. San Diego, CA: Academic Press. pp. 151-218.
- Devos, T., Silver, L. A., Mackie, D. M., & Smith, E. R. (2002). Experiencing intergroup emotions. In D. M. Mackie & E. R. Smith (Eds.), *From prejudice to intergroup emotions: Differentiated reactions to social group*. New York: Psychology Press. pp. 111-134.
- Ellemers, N., Van Knippenberg, A., & Wilke, H. (1990). The influence of permeability of group boundaries and stability of group status on strategies of individual mobility and social change. *British Journal of Social Psychology*, **23**, 233-246.
- Ferguson, T. J. & Rule, B. G. (1983). An attributional perspective on anger and aggression. In R. G. Geen & E. I. Donnerstein (Eds.), *Aggression: Theoretical and empirical reviews: Theoretical and methodological issues*. New York: Academic Press. pp. 41-74.
- Greenberg, J. (1988). Equity and workplace status: A field experiment. *Journal of Applied Psychology*, **73**, 606-613.
- Hammock, G., Rosen, S., Richardson, D., & Berstein, S. (1989). Aggression as equity restoration. *Journal of Research in Personality*, **23**, 398-409.
- Jackson, J. W. & Smith, E. R. (1999). Conceptualizing social identity: A new framework and evidence for the impact of different dimensions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 120-135.
- Kumagai, T. & Ohbuchi, K. (2001). The effect of collective self-esteem and group membership on aggression of "third-party victim." *Tohoku Psychologica Folia*, **60**, 35-44.
- Kumagai, T. & Ohbuchi, K. (2006). Third party aggression: Effects of cooperation and group membership. *Psychologia*, **49**, 152-161.
- LeVine, R. A. & Campbell, D. T. (1972). *Ethnocentrism: Theories of conflict, ethnic attitudes and group behavior*. New York: Wiley.
- Lickel, B., Miller, N., Stenstrom, D. M., Denson, T. F., & Schmader, T. (2006). Vicarious retribution: The role of collective blame in intergroup aggression. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **10**, 372-390.
- Mackie, D. M., Devos, T., & Smith, E. R. (2000). Intergroup emotions: Explaining of offensive action tendencies in an intergroup context. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 602-616.
- Mullen, B., Brown, R., & Smith, C. (1992). In-group bias as a function of salience, relevance, and status: An integration. *European Journal of Social Psychology*, **22**, 103-122.
- Ohbuchi, K. (1996). Motivational perspectives of aggression and the two-process model. *Tohoku Psychologica Folia*, **55**, 81-91.
- Ohbuchi, K. (2007). The social bonds of justice: Theory and research. In K. Ohbuchi

## 熊谷・大淵：非当事者攻撃と不公正知覚

- (Ed.), *Social justice in Japan. Concepts, theories and paradigms*. Melbourne, Australia: Trans Pacific Press. pp. 3-33.
- O'Leary, M. R. & Dengerink, H. A. (1973). Aggression as a function of the intensity and pattern of attack. *Journal of Experimental Research in Personality*, **7**, 61-70.
- Richardson, D., Leonard, K., Taylor, S., & Hammock, G. (1985). Male violence toward females: Victims and aggressor variables. *Journal of Psychology*, **119**, 129-135.
- Reicher, S. D. (1987). Crowd behaviour as social action. In J. C. Turner, M. A. Hogg, P. J. Oakes, S. D. Reicher, & M. Wetherell (Eds.), *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford, UK: Blackwell. pp. 171-202. (蘭 千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美(訳) (1995). 社会集団の再発見 自己カテゴリー化理論 誠信書房)
- Rosenbaum, M. E., Moore, D. L., Cotton, J. L., Cook, M. S., Hieser, R. A., Shover, M. N., & Gray, M. J. (1980). Group productivity and process: Pure and mixed reward structures and task interdependence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 626-642.
- Sherif, M. (1966). *Group conflict and cooperation: Their social psychology*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Sherif, M., Harvey, O. J., White, B. J., Hood, W. R., & Sherif, C. W. (1961). *Intergroup cooperation and competition. The robber's cave experiment*. Norman, OK: University of Oklahoma.
- Skarlicki, D. P. & Folger, R. (1997). Retaliation in the workplace: The roles of distributive, procedural, and interactional justice. *Journal of Applied Psychology*, **82**, 434-443.
- Smith, E. R. (1999). Affective and cognitive implications of a group becoming part of the self: New models of prejudice and of the self-concept. In D. Abrams & M. A. Hogg (Eds.), *Social identity and social cognition*. Oxford, UK: Blackwell. pp. 183-196.
- Spears, R., Doosje, B., & Ellemers, N. (1997). Self-stereotyping in the face of threats to group status and distinctiveness: The role of group identification. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **23**, 538-553.
- Tedeschi, J. T. & Felson, R. B. (1994). *Violence, aggression & coercive actions*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Tyler, T. R., Boeckman, R. J., Smith, H. J., & Huo, Y. J. (1997). *Social justice in a diverse society*. Boulder, CO: Westview Press. (大淵憲一・菅原郁夫(監訳) (2000). 多元社会における正義と公正 ブレーン出版)
- Van den Bos, K. (2003). On the subjective quality of social justice: The role of affect as information in the psychology of justice judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 482-498.
- Van den Bos, K. & Lind, A. E. (2002). Uncertainty management by means of fairness judgments. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*: 34. San Diego, CA: Academic Press. pp. 1-60.
- Van Knippenberg, A. & Ellemers, N. (1990). Social identity and intergroup differentiation processes. In W. Stroebe & M. Hewstone (Eds.), *European Review of Social Psychology*: 1. Chichester, UK: Wiley. pp. 137-169.
- Williams, K. D. & Zadro, L. (2005). Ostracism: The indiscriminate early detection system. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. V. Hoppel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. New York: Psychology Press. pp. 19-34.
- Yzerbyt, V., Dumont, M., Wigboldus, D., & Gordijn, E. (2003). I feel for us: The impact of categorization and identification on emotions and action tendencies. *British Journal of Social Psychology*, **42**, 533-549.

(2008年2月29日受稿, 2008年7月24日掲載決定)